

# 道範撰『金剛頂經開題勘註』について

中村 本然

## 一、はじめに

『金剛頂經開題勘註』は道範(一一七八―一二五二)が、弘法大師空海(七七四―八三五)の『金剛頂經開題』について注釈を加えたものとされる。『金剛頂經開題』は標題が物語るように『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經』に対する空海の考えを明かした著作である。

『金剛頂經開題』の特徴として、『辯頭密二教論』を意識した論の展開が挙げられる。いうまでもなく『辯頭密二教論』は空海が頭教に対する密教の特異性を論述したものである。『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』をはじめとする六經と『大智度論』等の三論によって、空海の捉える密教観が論じられる。『辯頭密二教論』には冒頭から『秘密金剛頂經』によらばと記述され、随所に「具さには『金剛頂經』に説くが如し」とあるように、空海は『金剛頂經』に比重を置きながら論じた可能性が想定される。

さてこの度の報告で扱う『金剛頂經開題勘註』の奥書には  
建長三年辛亥十二月一日黄昏時書写之了

淵信之

一校合了

又云。同三日以或本又一交之件本者本末両卷也。所謂四大品事已下本也。題云『不詳』勘注  
或本云

学頭正智院阿闍梨道範撰之云云<sup>①</sup>

とある。建長三年（一二五二）十一月一日の夕暮れ時に淵信之（不詳）が書写し終わったと記されている。また同じ月の三日に、別の異本によって校合している。その異本は本末の二卷からなるものであった。その異本には正智院の学頭道範がこの書を撰述したことが残されている。

奥書から看取されることは『金剛頂経開題勘註』が建長三年までには著わされ、幾本かに亘って書写されていた事実である。その中に作者を道範とする一本が存在する。一二五一年は道範の入寂した前年に相当する。周辺の事情から判断されるように、この論書を道範の撰述と特定することは難しくない。これから『金剛頂経開題勘註』について検討することにした。

## 二、『金剛頂経開題勘註』の構成内容について

『金剛頂経開題勘註』は『金剛頂経開題』に関する設題に道範が所見を述べる形式をとっている。都合四十一の論題が設けられているが、その一一を列挙すると左記のようになる。

### a 『金剛頂経開題勘註』本

- ①一。蝸角民盲羅睺事
- ②一。蚊映族聾大鵬事
- ③一。法仏三密四種言語不能及。曼荼四身九種心識不得縁事
- ④一。大惠懇請能仁不許事

- ⑤一。迦葉至扣寂尊尚閉事
  - ⑥一。海妙但見月事
  - ⑦一。地藏略讚日蔽事
  - ⑧一。廢詮之客憇郊放牛事
  - ⑨一。絕慮之賓臨朝待鷄事
  - ⑩一。冰照摧輪摧軫染淨之岳事
  - ⑪一。水波游艇折楫風水之海事
  - ⑫一。十六輪王各領自國。四撰宰輔分職利他事
  - ⑬一。如衆星共北辰事
  - ⑭一。四種曼荼羅本居金剛性事
  - ⑮一。四種法身共陳此道事
  - ⑯一。不捨此身頓証仏位事
  - ⑰一。十八會処事
- b 『金剛頂經開題勘註』末
- ①一。四大品事
  - ②一。復次有十對事
  - ③一。題目事
  - ④一。一字曰言二字曰名事

- ⑤ 一。一百金剛事
- ⑥ 一。就此三十七又分能入金智所入金剛定能証金剛人事
- ⑦ 一。總有一百二十金剛名事
- ⑧ 一。約三重曼荼羅眷屬有一千五十七尊
- ⑨ 一。一千五十七尊
- ⑩ 一。帝網非喻塵墨難記事
- ⑪ 一。自他五智仏事
- ⑫ 一。三門分別事
- ⑬ 一。初三自一心本覺中有四事
- ⑭ 一。真如門本覺又有二別事
- ⑮ 一。此十二大皆是生滅門法門等事
- ⑯ 一。然非九種心量之所緣一一心之所緣而已。又非一一心之所緣不二心之所証而已事
- ⑰ 一。又三十二大乘各有本有末事
- ⑱ 一。法身自証最勝頂輪王事
- ⑲ 一。能以教線貫人天華不乱墜三途事
- ⑳ 一。六合積六相義。四悉檀三声等事
- ㉑ 一。六曼荼羅事
- ㉒ 一。先行法事
- ㉓ 一。衆生界者十方三世六趣有漏非情事

④一。十種法界是如來金剛曼荼羅。聚十界身相為一箇曼荼羅身事

### 三、『金剛頂經開題勘註』に説かれる教説の特徴について

『金剛頂經開題勘註』には、空海の『金剛頂經開題』に関する道範の解釈が説示されると共に、道範の時代に生じていた教学上の諸問題に対する論及が網羅されている。この報告で指摘することを列挙するならば、次のようになる。

- 1、四家大乘や五重問答に配する解釈
- 2、如義言説をめぐる問題について
- 3、教主論としての三転説について
- 4、入定と即身成仏について

#### 1、四家大乘や五重問答に配する解釈

『金剛頂經開題』の「綱緒」において、空海は顯教と密教の相異について以下のように論じる。

廢詮の客は郊を憩って牛を放ち。絶慮の賓は廟に臨んで鶏を待つ。冰照の椎輪は轅を染淨の岳に摧き。水波の游艇は楫を風水の海に折る。

妙雲開塔の朝。金薩灌頂の時。三密の秘蔵は憚して大虚を曜し。五智の大我は妙相を湛えて以て靈台に坐す。<sup>⑤</sup>

廢詮談旨諦を究極と解する人は、自心の根源を極めるに至っていない。また諸法の実相を言亡慮絶の境と了解する人は、如来滅後一千年を経て出現する清辨菩薩のように修羅宮に入って、弥勒仏の下生を期待するようなものである。さらに氷と水、光と影が相い離れないように、法性と無明は一如である。従って無明の惑は本より法性を離れずして、惑によって法性が変じて無明となる。また

水を離れて波が存在しないように、波無くして水は存在しないのである。このような境地も未だ究竟ではなく、風水の海に没するよ  
うに究極の果分に至ることはない、と空海は主張する。

この『金剛頂経開題』の説文に、道範は十住心教判を配当した言及、即ち「四家大乘」や「五重問答」を取り入れた解明を試みている。

⑧一。麁詮之客は郊に憩って牛を放つ事

法相、初めて大乘に入るが故に放牛と云う<sup>③</sup>

道範はこの文を法相宗の教理を謳ったものとみる。放牛とは小乗から大乘の教えに入門することと受けとめる。

⑨一。絶慮の賓は朝に臨んで鶏を待つ事

三論、清辨、修羅窟に入って三会を待つ<sup>④</sup>の意歟

言断心滅の境地を享受する人が、入廟して龍華三会の朝を待ち焦がれる内容は、三論宗の教義に相当するという。これは慈恩大師  
基(六三二―六八二)に師事した慧沼(六五〇―七一四)の『成唯識論了義燈』の説相に基づいている。

然護法菩薩千一百年後方始出世。造此論積及広百論積。清辨菩薩亦同時出造掌珍論。此時大乘方諍空有<sup>⑤</sup>。

如来の滅後千百年に護法菩薩がこの世に出て、『成唯識論』を注釈し、清辨菩薩は『掌珍論』を造論して、大乘仏教の空と有の議  
論を諍わせたとある。宥快(二三四五―一四二六)の『金剛頂経開題鈔』<sup>⑥</sup>には、清辨菩薩はこの時に修羅窟に入って長寿の身を得て、慈  
尊(弥勒)菩薩の下生を待って空有の議論を決着しようとしたと補っている。

⑩一。冰照の摧輪は転染浄之岳に摧く事

天台、染浄本覚妙法の意歟。冰照、之を尋ねるべし。若し水、照らす歟。湿金即ち照影の意歟<sup>⑦</sup>

『金剛頂経開題』の一文を道範は天台宗と教理とし、染浄の岳を染浄本覚妙法と積する。ここに指摘される「染浄本覚妙法」は、空  
海が『法華経開題』において創案した概念である。

『法華経開題』は『妙法蓮華経』に関する空海の理解が述べられている。空海は「妙法」に染浄本覚妙法・清浄本覚妙法・一心法界

本覚妙法・三自本覚妙法・一如本覚妙法・不二本覚妙法の六種の意味があるとし、『妙法蓮華經』を染浄本覚妙法と結びつける。また『妙法蓮華經』を、衆生の機縁に応じて他受用身応化仏が説いた經典と説明する。これは『辯顕密二教論』でみせた他受用應化身による隨機の説を顕教とし、『妙法蓮華經』を応化仏の所説とする解釈の継承と考えられる。ところで空海は『秘藏宝鑰』では『妙法蓮華經』を所依とする天台教学を第八住心とし、第五重問答中の「一法界心」と扱う。『法華經開題』に開示される六重本覚妙法に当て嵌めるならば「一心法界本覚妙法」になる。しかしながら、『法華經開題』では天台宗が所依とする『妙法蓮華經』つまり「染浄本覚妙法」は第一重問答とされている。空海によってなされる多様な対応は、その後の真言教学に深刻な影を落としている。

静遍(一一六六―一二二四)の『顕密二教論手鏡鈔』には、教学上の矛盾の会通を試みた様子がみられる。静遍は初重問答を染浄始覚とする。『法華經開題』の六重本覚によって生じた染浄本覚妙法の問題について、静遍は天台教学の『妙法蓮華經』解釈に一道清浄へ「妙蓮不染」と中道第一義の二種を認め、前者を初重の染浄本覚とし、後者を第三重の一法界本覚とする措置によって、教学上の疑問の解消を諮っている。道範はそのような経緯を熟知しており、『金剛頂經開題勘註』にも反映させている。

⑪一。水波の游艇は楫を風水の海に折る事

華嚴、風水竜王、一法界の意。水波、水波の猶し、之れを思い見るべし。<sup>12</sup>

道範は説相から華嚴の教理とする。風水の海とは『釈摩訶衍論』に説かれる出生風水龍王のことであり、無尽一法界を意味する。道範の解釈は空海の教学を引き継ぐものである。

『釈摩訶衍論』の「解釈分」は一体摩訶衍・三自摩訶衍の二法と心真如門・心生滅門の二門が論じられる。<sup>13</sup> しかもこの二法二門にはそれぞれ十種の差別名が与えられる。二法である一体摩訶衍と三自摩訶衍は第八の「摩訶衍」に関する二名として登場する。第三の「出生竜王」から派生されるのが出生光明竜王と出生風水竜王であり、第七の「一法界」として開演されるのが純白一法界・無尽一法界である。<sup>14</sup> 因みに出生光明竜王と純白一法界は一体摩訶衍と同質とされ、出生風水竜王と無尽一法界は三自摩訶衍と同様とされる。

十住心思想を構築するに際して、空海は第九極無自性住心に心を砕いている。つまり華嚴の教理について、細心なる配慮を施して

いるのである。当時の華嚴宗を代表する人物に普幾(生存年不詳)がいる。普幾はその著『華嚴一乘開心論』で『釈摩訶衍論』が説示する廻向遍布門や四種大鏡の教説を用いて、華嚴の教主大毘盧遮那如来を論ずる。<sup>16</sup> 普幾が論じる教理的展開を予見した対処を、空海は『秘密曼荼羅十住心論』や『秘藏宝鑰』でみせている。

承知のように『釈摩訶衍論』の「廻向遍布門」には「立義分」所説の不二摩訶衍法と前後両重の所入法と能入門である三十三法門の關係が論じられる。併せて不二摩訶衍法と華嚴の教主盧舍那仏の関連についても明言し、その同一性が論証されている。<sup>17</sup>

ところが空海は『釈論指事』において、『釈摩訶衍論』の「廻向遍布門」には不二摩訶衍法と三自摩訶衍が明されると解釈する。<sup>18</sup> つまり不二摩訶衍法を除く三十二法門を三自摩訶衍とし、華嚴の教主毘盧舍那仏をこの範疇に入れた理解を行うのである。また『秘密曼荼羅十住心論』では『釈摩訶衍論』に説かれる四種大鏡中の如実空鏡を真如門の法へ一体摩訶衍或いは一体一心摩訶衍」とし、因熏習鏡を三自門の法即ち生滅門の法へ三自摩訶衍或いは三自一心摩訶衍」とする考証を提供する。<sup>19</sup> これらはいずれも普幾の『釈摩訶衍論』解釈を視野に入れた空海なりの対応と判断される。

同様に『秘藏宝鑰』にも普幾を意識した記述が散見する。<sup>20</sup> 秘密莊嚴心とは、菩提心を覆っていた心の垢が消え、本来の心が開かれた境涯である。このような境界は十地の位に至っても極めることができない。三自の境位においてはなおさらと言いつつ放っている。<sup>21</sup> 華嚴教学はいうまでもなく顕教すべてを三自(門法)としたい空海の目論見が垣間見れる。

さて『秘藏宝鑰』等で空海が唱える「三自一心の法」や「三自門の法」は、『釈摩訶衍論』に施説される三十三法門中の前重生滅門所入の三自一心摩訶衍或いは後重生滅門所入の三自摩訶衍のいずれを指するのか判然としていない。空海自身の姿勢は不明瞭なままである。三自門に言及がみられるのは『金剛般若波羅蜜經開題』においてである。

龍猛菩薩の釈義に約して之を談ぜば。謂う所、有為とは三自の法。無為とは一如の法。法とは衆生の心なり。三自門に染淨清淨一法界三自の四種の本覚有り。一如門の中に亦、恒沙の仏徳を具し。円満海の中に亦、無量の徳を具す。此の如くの諸徳は皆是れ一衆生の心法なり。<sup>22</sup>

『釈摩訶衍論』には、無明による有為法である三自の法(生滅門の法)、無明の念相を離れた無為法である一如の法(真如門の法)が明かされる。空海は有為法である三自門に染淨・清淨・一法界・三自の四種の本覚をみる。生滅門には無明による差別相がみられ、一如門(真如門)や円満海(不二門)は一相にして無量の功德に満ちている。三自門(生滅門)に施設される四種本覚は、『法華經開題』中の六重本覚の構想へと繋がる要因となっている。

四種本覚について『金剛頂經開題勸註』では、

⑬一。初めの三自一心本覚の中に四有る事

問う。此の四種の分別、如何

答う。染淨覺他縁。清淨本覚三心一法界本覚。即ち後重生滅所入無尽一法界なり。即ち一道三自本覚前重三自一心即極無なり。

染淨本覚を以て法相大乘と為す事は。且く真妄而二の義に相当すべきなり<sup>22)</sup>

とし、四家大乘に当て嵌め、曖昧であった空海の教説を明瞭ならしめている。即ち、染淨本覚は第六他縁大乘心、清淨本覚は第七覺心不生心、一法界本覚は後重生滅門所入の無尽一法界(三自摩訶衍)にして第八一道無為心、三自本覚は前重生滅門所入の三自一心摩訶衍にして第九極無自性心と釈している。

## 2、如義言説をめぐる問題について

『金剛頂經開題勸註』には、如義言説を巡る議論が残されている。道範当時「如義言説」に関する論争が禪宗との間で生じていた。この事に関する考証は前に報告している。<sup>23)</sup>『声字実相義抄』で決択したことを、『金剛頂經開題勸註』で再検証しておく必要に迫られていたのであろう。

『金剛頂經開題勸註』では、如義言説によって三密の法門である密教を説くことが可能であり、一一識心によって自性身等の四種法身の境涯を体認することができるのであろうか、という質疑から始められている。道範は如義言説等によって三密の法門を説かず

ることはできないと答えている。

③一。法仏の三密は四種の言語も及ぶこと能わず。曼荼の四身は九種の心識も縁ずる事を得ざる事

問う、如義語・一一心、三密を説き四身を縁ずると言うべし耶 答う。然るべからず

問う。二教論中に。五種言説・十種心量を以て顕密を分別する時。四種と九種とを以て顕と為す云々 第五第十を密と為す。又今所天下の文に。然るに九種心量の所縁に非ずして一一心所縁なるのみ文 此れ等の釈文分明に三密四曼は如義言説・一一心識の所説・所縁なり。如何<sup>24</sup>

ここに明される如義言説が、弘法大師の『辯顕密二教論』の教説に背くことは論じるまでもない。道範の見識には、如義言説に関するこの当時の仏教界の事情が介在している。道範の頃は仏心宗(禪宗)が隆盛を迎えつつあった。その禪宗の標榜する以心伝心と『金剛三昧経』所説の如義言説は同一視され、議論の対象となっていたのである。

『金剛頂経開題勘註』には、以心伝心ともしれば同一視される如義言説について、真言密教という如義言説との相異を明瞭にすることに併せて、真言教学における如義言説の概念の再構築が試みられている。弘法大師が潤色した如義言説の再考ではなく、道範は『釈摩訶衍論』が典拠とする『金剛三昧経』の如義言説に新たな解釈を導入することになる。

空海は『辯顕密二教論』において、『釈摩訶衍論』所説の五種言説や十種心量を用いて、一般仏教と密教の相異を明確にする。即ち『釈摩訶衍論』という相言説・夢言説・妄執言説・無始言説の四種言説及び眼識心乃至多一識心等の心量を一般顕教の言説や心量とみなす一方で、如義言説や一一識心を密教の言説とする。<sup>25</sup>『辯顕密二教論』に従うならば、如義言説・一一識心が密教を表詮することは言うまでもない。しかしながら、道範が『金剛頂経開題勘註』で提唱することになる如義言説は、空海が説示した如義言説とは著しく異なる。

答う。二教論の釈に於いては古来三義有り。

一に云う。真生二門離不離の文を以て顕密二教離不離の義を準証するなり。

一に云う。顯密重重之意也。謂う所は生滅に望むる時は真如是れ密なり。真如に望むる時は不二是れ密なり。仍て下の文又一心の所縁に非ず。不二心の所証なるのみ文 釈次第顯然なり云云

一に云う。三昧經の如義に真如不二の如義を含説せり。論の意、亦然なり。之れに依つて大師、不二の如義を取つて真言と爲す。此の義は二門分別の時、真如不二を以て無爲門と爲す。仍て如義の中に顯密あるなり。經論俱に二重の如義を含まるが故に。大師、密に証と爲さるるなり。之れを思ふべし。若し真生二門を以て合して有爲門と爲す。不二を以て独り無爲門と爲すれば。是れ至極の二門分別なり。此れに準ぜば三門分別の時、二門を以て四種の言説と爲す。不二を以て如義と爲すなり。論の意又此の義を存す。大師の引証即ち此の義なり。云云 又至下の釈は三門の實知實相に於いて次第に遮して之れを表する意なり。謂く真門の實相は生滅の實知所縁に非ず。不二實相は真門の實知の所縁に非ず。唯だ是れ不二心の所証なるのみ。此の意を得て文を見るべし。但し今、四曼を以て九種に對す。遮詮の意は、一に云う。焦冥を大鵬に對するの詞なり。一に云う。一一心を以て九種に撰る。十識を以て顯密を書すの義なり云云 以上、二教論の料簡、之れを思ふべし<sup>26</sup>

『金剛頂經開題勘註』で道範は、このように明かす。『辯顯密二教論』の説かれる如義言説については、古くから議論の対象とされ、これまでに三説が唱えられている。

一つには、真如門・生滅門は衆生心である一心を開示したものであり、両者は離不離の關係にある。その視点に添うならば、顯教・密教は相反するものでなく、正に離不離の關係にあるといえよう。

二つには、生滅門を顯教とする時には、真如門は密教となる。真・生二門を顯教とみる時には、不二門が密教となる。この場合には如義言説や一一識心によって密教を解することはできない。密教は不二摩訶衍法の世界であるからである。『釈摩訶衍論』では、如義言説・一一識心は真如門の言説・心量と設定されている。如義言説を明かす『金剛三昧經』には、言語に文語と(如)義語の二種が説かれ、文語は真実に冥く、一方の義語は真理を談ずるとされる。<sup>27</sup>『釈摩訶衍論』では、この如義言説を真如門の言語とし、不二摩訶衍法は、独尊にして一切の機根や教説を離れたものとする。不二摩訶衍法は真如門では扱えない法として位置づけられている。

そもそも『釈摩訶衍論』の作者が如義言説や一一識心を新たに導入せざるを得ない背景には、本論である『大乘起信論』の真如門解釈にその要因が求められる。『大乘起信論』では心真如を言説の相・名字の相・心縁の相を離れると規定する一方で、如実空・如実不空という概念によって真如を表詮する。<sup>28)</sup> そのために言語化された如実空・如実不空が『大乘起信論』の真如をめぐる議論の一因となっている。『大乘起信論』の立場から様々な検証がなされたにも関わらず、真如に関する議論は止むことはなかったものと推測される。『釈摩訶衍論』の造論者が示す対応は如実空・如実不空によって提示した真如を表詮できる言語の提供と、真如さえも及ばない境地（不二摩訶衍法）の樹立であったと考えられる。このように『釈摩訶衍論』中の如義言説・一一識心は、真如門の枠組みを離れるものではない。ましてや不二摩訶衍法を説き明かすことはできない。

ところで空海は『釈摩訶衍論』にいう不二摩訶衍法を自性法身とし、密教の領域に相応すると解した。それも離機離教の不二摩訶衍法の機根こそが密教の機根であると明言し、『金剛頂経』は不二摩訶衍法の世界を開示した経典と説くにいたったのである。<sup>29)</sup> しかも真如門の言説である如義言説を真言と同一に扱えばかりでなく、不二摩訶衍法とも融会せしめたのである。言うなれば如義言説に関する議論は、空海自身の『釈摩訶衍論』解釈に起因するといえよう。

道範は第三番目の説として『金剛三昧経』の如義言説に真如如義と不二如義の二説を説き、不二如義を空海は真言とみなすに及んだと会通する。

如義言説について、真如如義と不二如義を示唆したのは道範に思想的影響を及ぼした禅林寺静遍（一一六六―一二二四）であった。<sup>30)</sup> 静遍はその著『辯顕密二教論手鏡鈔』において、『金剛三昧経』にいわれる如義言説には二重の如義の意が含まれるとした。<sup>31)</sup> いわゆる真如門の如義と不二門の如義であり、真言宗で論じられる如義は不二門の如義言説であるという新たな意味を見出している。静遍の解釈には伏線があった。中国宋代の『釈摩訶衍論』の注釈である『釈摩訶衍論贊玄疏』において通法（年代不詳）は、如義言説に真如如義と生滅如義の二種を認める。<sup>32)</sup> 即ち『金剛三昧経』の教説に従い、仏説は義語であり文語ではないとするならば、文語によって語られた仏説はすべて妄語となる。一方、生滅門中に如義語を認めるならば、それこそ自家撞着をおこすことになる。この教理的

な曖昧さを解消するために『金剛三昧経』の如義に二種の如義即ち真如如義と生滅如義を建立する。静遍は禅宗との対応に際して、『金剛三昧経』の如義言説の中に真如如義と不二如義を設定し、会通ならしめている。

### 3、教主論としての三転説について

三転説は真言宗における教主論である。諸法の根源である理と智が和合する時に、事点としての人体が生じる。この理智事の三転具足の仏身を教主とみる。換言すれば、自性を理、自受用身を智、他受用身を事として、理智和合せる他受用身の説法を提唱するのである。

#### ⑥ 一。此の三十七に就いて又能人の金智・所入の金剛定・能証の金剛人を分つ事

問う。智定人の三種、其の義如何

答う。是れ理智事の三転なり。三部三點、自家の規模なり云云 禅林<sup>33</sup>

三転説は醍醐教学の中で生ずるにいたったといわれる。取り分け道範に思想的影響を及ぼした静遍との関わりが取り沙汰されている。頼瑜(二二六―一三〇四)の『瑜祇経拾古鈔』には、

私に云わく。理智の配当然るべし。事點の了簡不可なり。此の理智事の三點は彼の禅林末某が清瀧の遺風を酌んで三宝院の秘決と号す。事相教相に亘って盛んに此の義を述ぶ。又開題と心目を依憑すと雖も。其の文髣髴として頗る証と為すに足らず矣。就中、何ぞ智証他家の釈文に依って当流の自門の奥義を漫ず。加之、即ち報恩院上綱に此の事を尋ね奉って仰られて云わく。此の事、我が流に於いて全く記録無し。又口決を伝えずして誤り甚だし乎。云々 故に知んぬ、嫡嫡の正統、既に之の義無し。恐らく禅林の今案なる歟。<sup>34</sup>

とある。理智事の三転説は、禅林寺の静遍が醍醐の教学を汲んで「三宝院の秘決」と号していると紹介する。報恩院の上綱である憲深(一一九二―一二六三)に頼瑜が糾問したところでは、三転説は真言密教の正統なる流れにあった思想ではなく、静遍が唱えるにいたっ

たと伝えてある。静遍の教学や教主論としての三転説については既に報告している。<sup>35</sup>『瑜祇経拾古鈔』の記述で触れておきたいのは、三転説の思想的典拠として『金剛頂経開題』や円珍(八一四—八九一)述の『大毘盧遮那成道心目』を指摘することである。

静遍は『秘宗文義要』で、本有の三身とは自性身(理)・自受用身(智)・他受用身(事)とし、三転和合せる時は理をもって自性身とする。もし理智を法とする時には、理智具足の本有の人(事)を自性身とみなすと釈す。<sup>36</sup>

道範は静遍に教学的恩恵を受けている。道範が貞応四年(一二二五)に撰述した『貞応抄』には、教主論としての三転説について詳しい。教主については、本有内証の横平等と随縁顕現の豎差別の視点からの考証がみられる。まず横平等である。

初めに横三身とは。即ち毘盧舍那の遍一切処の性浄圓明三轉の方便なり。謂わく心内の九八七三識を以て。次の如く理智事の三轉と為す。是れ法身・般若・解脱の三點(三轉)であり、自性身・自受用身・他受用身の三身とされる。此の三身の中の理智を法と為し、他受を人と為す。此の人は理智和合して別体無し。<sup>37</sup>

横平等とは、毘盧舍那が一切処に遍満する性浄円明の三轉方便のことをいう。また心内の九識・八識・七識を理智事の三轉とする。それは法身・般若・解脱の三點(三轉)であり、自性身・自受用身・他受用身の三身とされる。この三身においては理・智を法とし、事を人とする。理智事三轉の典拠について

問う。此の三轉の義、其の証は何に在らん 答う。金剛頂経開題に云わく。三十七尊各各能入の金剛智。所入の金剛定。能証の金剛人有り 文 是れ即ち誠証なり。定とは理なり。総じて此の三轉とは三密なり。三部なり。軌の建立に約して偏えに此の旨に依って心を得と見るべし。驚疑すべからず 二二云<sup>38</sup>

とあり、『貞応抄』でも三転説の思想的根拠を『金剛頂経開題』とする。理智和合せる事(人)を三転説とするところから、金剛定を理とする説明も加えている。また三転は三密や三部に解せられると釈し、この教説について疑われないように誠めている。『貞応抄』は、続いて豎差別の三身を紹介する。

次豎の三身とは。金界の五智・三十七智。胎界の四重・十三大院、之を分つて三身と為す。先ず金界の五方五方(智カ?)に付い

て之れを分別す。中東南は是れ性淨圓明の三轉なり。俱に是れ自証の故に。総じて法身と為す。是れ心内の九八七の三識なり。次に西方妙觀察智は邪正不謬の故に。始めて迷界を見て大悲を起す。是れを他受用身と為す。次に北方の成事智は正しく摂化衆生の事業智の故に化身と為す。此の二は是れ心外の六五二識なり。中略。

次に胎界の四重四身とは。安然の云わく教時義 胎藏界会の中台八葉を自性身と名づく。三部眷属を自受用身と為す。第二重の諸大心衆を他受用身と為す。第三重の釈迦仏等を変化身と名づく。九界の眷属を等流身と名づく。文 十三院准じて之れを思ふべし<sup>39</sup>。( )は筆者

豎の三身に関しては、金剛・胎藏の両部による解釈を行っている。初めに金剛界である。中(大日如来・法界体性智)、東(阿閼如来・大円鏡智)、南(宝生如来・平等性智)は、性淨圓明の三轉である。これを自証とし法身とする。これらの三智は心内の九識・八識・七識を転じて生じた智である。次に西方(無量寿如来)の妙觀察智は、決して正邪を誤ることのない智とされる。迷界にある衆生に対して大悲を起す意味で他受用身とされる。次に北方(不空成就如来)の成事智は、正しく衆生を摂化し事業をなさしめる智にして、化身とされる。妙觀察智・成事智の二智は、心外の六識や前五識を転じて得る智である。

次に胎藏については、安然(八四一―九二五頃)の『教時義』の説によって胎藏十三院を論じる。大日如来等の中台八葉院を自性身とし、仏部・蓮華部・金剛部の三部を自受用身とみる。第二重の多くの大心(菩提心)の衆即ち菩薩等を他受用身とする。第三重は釈迦仏等の變化身である。仏界を除く九界の眷属は等流身とみる。

豎差別では機根に応じた説法の仏身について明す。それには本地自性身・能加持身・所加持身の三種の別がある。本地自性身とは大日如来内証の三轉であり、法身とされる。その住処は密嚴国土とされる。能加持身は妙觀察智の無量寿如来であり、他受用報身にして淨仏国土の身である。所加持身は成就衆生身つまり釈迦如来にして、化身であり、その住処は穢土とされる。

三身に関しては、修行者の自心開顯の観点からの解釈もみられる。即ち衆生は穢土において釈迦如来の教に遭遇して菩提心を発す。次に淨仏国土に生まれて無尽に莊嚴された無量寿如来の驚覚を蒙ることによって、毘盧舍那内証の境地に入ることになるといふ。<sup>40</sup>

『金剛頂経開題勘註』には、釈迦・驚覚仏(無量寿仏)・大毘盧舍那仏を、生滅門・真如門・不二門に配した理解がみられる。

禅林上綱の云わく。今、三門守護所説三重の仏なり。三祇難行・六年苦行の仏は生滅門。虚空に現(示カ?)現せる驚覚の仏は真如門。三密自証究竟即心の仏は不二門なり。是れ驚覚の仏、常途極果に望めば。尚、九種住心を超ゆるが故に一一心の所縁と云うなり。此の仏は後際を知ると雖も。如来自証の境、人に示すべからず。故に唯だ不二の所縁と云うなり。<sup>④</sup>( )は筆者

三大無数劫という難行や六年の苦行を行じた仏は生滅門の仏であり、虚空に示現する驚覚仏は真如門の仏であり、三密を自ら証せる究竟即心の仏は不二門の仏である。驚覚仏とは、無余涅槃に住せる一切義成就菩薩を驚き覚ます仏である。いわば顕教の極果を成就した仏ということになる。その仏を教導する驚覚仏であるから十住心でいうと九種の住心を超えた存在である。しかしながら、如来の自内証までを衆生に開示することはできない。法身の内証の境涯は不二門所縁の境地とするからである。これは禅林寺上綱即ち静遍による理解である。このように道範は静遍から多くの示唆を受けているといえよう。

#### 4、入定と即身成仏とについて

弘法大師の入定については古来から三種の説が提出されている。いわゆる金剛定説・微細定説・滅尽定説である。金剛定説は、伝承では真然の記とされる『阿波国太龍寺縁起』や『高野秘記』等にある「金剛定」を典拠とする説であり、微細定説は『覚阿問答鈔』『中間記』『玄秘鈔』等にある「微細定」に基づき、滅尽定説は済暹の『弘法大師御入定勘決記』による説である。『弘法大師の入定観』<sup>⑤</sup>で森田龍僊師は、金剛定説・微細定説・滅尽定説の三説について、以下のように総括している。

これを要するに、大師所定の定体如何に対する上来の三説たるや、法身如来の金剛の三密に安住するという義辺からは、よろしくこれを金剛定といふべきであり、またこの金剛定が、因人の五眼の窺知しゑられない甚深微細の境地なりといふ義辺からは、よろしくこれを微細定といふべきであり、またこの微細定が、弥勒出世までを一貫する長期の入定なりといふ義辺からは、よろしくこれを滅尽定といふべきである。すなわち大師所入の禅定におのずから体相用の三義これあるべきであるから、その体より

しては金剛定といふべく、その相よりしては微細定といふべき、その用よりしては滅尽定といふべきであり、かく意をうるにおいては三説全く一致に帰すべきものである。<sup>(42)</sup>

続いて問題となる金剛定説について検証したい。真然(八〇四―八九二)の伝承の残る『阿波国太龍寺縁起』には

承和二廻之曆。沽洗三月之天。遂に金剛定に入って永く石巖嶺に坐す。居を高野之樹下に卜して。神を都率之雲上に遊ばしむ。庶冀くば三會之雲に坐し。・・・<sup>(43)</sup>

とあり、大師空海は、承和二年三月にとうとう金剛定の禪定に入られ、永く岩窟に座し籠もられることになった。高野山の樹下に居を扱ばれ、神(魂)は未来仏である弥勒菩薩の兜率の浄土にあらしめられた。心から願うことは龍華三会の暁に再び祖師にまみえることが叶うように、という消息である。覚鑿(二〇九五―一四三三)の『弘法大師講式』にも同様の記載がみられる。

大師自ら記して曰く、居を高野の樹下に卜して神を兜率の雲上に遊ばし眼、日々の影向を闕かざして処々の遺跡を検知す、・・・伏しておもんみれば、舍利はこれ菩提実義の大日、大師はまた成仏加迹の尊体なり 南無高祖大師遍照金剛入定留身舍利<sup>(44)</sup>

また『高野山秘記』の「奥院石室」の段には

弘法大師は、弥勒菩薩の等流意なり。弥勒菩薩、知足天に上生せしむる間、五十六億七千万歳なり。大師彼の石室の内に金剛定<sup>(45)</sup> に入って彼の下生を期ふ。

と説かれる。弘法大師は弥勒菩薩の等流身の現れである。その弥勒菩薩は浄土である兜率天に五十六億七千万年の間おられる。大師は石室にあって金剛定に入られ、弥勒仏としての下生を心待ちにしておられる。『高野山秘記』は秘密念仏思想を樹立し、「南無大師遍照金剛」を提唱するにいたった道範の周辺と深く関与する。

金剛定の典拠としては、『金剛頂瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』にある「行者、金剛定に入らんと欲せば 先ず妙觀察智の印に住せよ」<sup>(46)</sup>の一文がいわれ、また『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』「金剛吉祥大成就品」に説示される禪定が指摘される。

若し金剛生の金剛子等有りて。常に此の明を持すれば。身は金剛山の如く。金剛杵の如く。金剛頂峯の如く金剛界如来の如く。

彼の薩埵金剛の如し<sup>47</sup>

或いは弘法大師が『教王経開題』でいう

心、不動三摩地に住して精勤決定するを金剛と名づく。一切の声聞縁覚、一切の菩薩如来。皆、金剛定に入て。能く煩惱を断じて自乗の果を得<sup>48</sup>

と示される金剛定であり、『金剛頂経開題』の金剛定がいわれる。『金剛頂経開題』には

此の三十七に就いて又能入の金剛智所入の金剛定能証の金剛人を分てば。惣じて一百八十の金剛の名有り<sup>49</sup>。

とある。道範の『金剛頂経開題勘註』には「是れ理智事の三転なり。三部三點、自家の規模なり云云 禅林」<sup>50</sup>とあり、『金剛頂経開題』の「金剛定」に依りながら教主論としての三転説を主張することになる。その経緯については先に論じたとおりである。

森田師は『請求目録』に述べられる「一心の利刀を翫ぶのは顕教であり、三密の金剛を揮うのは密蔵とする」を思想的な根拠とし、密教の金剛定とはすなわち三密の妙行である。この金剛定を修して法身如来金剛の三密に安住する大師入定の位は、これ実に金剛定の究極なりといふべきである<sup>51</sup>。

と、金剛定を密教修行の特徴である三密行と結論づけている。

ところで弘法大師の入定に関しては、早くから議論の対象とされていたようである。濟暹(一〇二五—一一一五)の『弘法大師御入定勘決記』には、大師の遺身を恭敬礼拝することの意義を問う質疑がある。濟暹は、恭敬する利益を『金光明経』によって考証している<sup>52</sup>。

答う、金光明経第十に云く。汝等苾芻咸な心に其の本身を礼敬すべし。此の舍利は乃ち是れ無量の戒定恵香の薫馥する所。最上の福田なり。極めて逢遇し難し。時に諸の苾芻及び諸の大衆咸な至心に合掌して舍利を恭敬礼拝して未曾有なりと歎ず。文此の経の誠文を以て吾が大師の遺身を恭敬すべき義を准知すべし。彼此、差別の義無きが故なり<sup>52</sup>。

『金光明経』にも説かれるように遺身を通して本身を思い礼敬すべきであるという。即ち戒定慧の三学を修められた本身(釈尊)の

舍利は最上の福田に喩えられる。福田に出逢えることは稀有なことである。そのような想いで大師の遺身を扱い相見えるべきである。「入定」に関する質問は続けられる。例えば、弥勒仏下生以後に大師入定の御身(故身)はどうなるのか、というものである。

問う、大師入定の故身を以て慈尊出世の時を待って以後、猶、此の故身を作して存住すべきや。為当若し化滅すべき耶

答う、此の事に於いては分明ならず。説文無きが故なり。若し強て例を取って迦葉の先例に准ぜば。慈尊出世を待ち得るが如き。即ち付属の袈裟を奉献し已って。仏の讚歎を蒙り問訊して以後、便ち所化の身滅す。是の身、世に久住して用無きが故なり。<sup>53</sup>

濟暹は、文章も残されていないのでよくわからないと率直に答えている。そして徐に大迦葉の逸話を紹介し、付属された袈裟を奉献し、仏の讚歎を受けた後には、その役目を終えられたので所化の身を留められることなく入滅したことを明かす。

濟暹は、出定後に大師入定の故身が磨滅することの意味について

問う、其の大師入定の故身は。出定の後、世に久住せずして即便ち磨滅する義の意何ん

答う、彼の留る所の入定の故身の如きは。是れ弥勒仏の出世の時の一切の人身の全身の相に順ぜざるが故に。此の小身、世に久住して益無し。故に速かに滅度に入るなり。<sup>54</sup>

と説き、大師入定の故身は、弥勒仏出世の時の全身と相応するものではない。従って出定後に小身によってこの世に久しく留まれる意義は認められない、と明かす。

覺鑿(一〇九五―一四三)の『弘法大師講式』には、遺身として入定される大師を恭敬礼拝し信仰した様子がみられる。

伏しておもんみれば、舍利はこれ菩提美義の大日、大師はまた成仏加迹の尊体なり 南無高祖大師遍照金剛入定留身舍利<sup>55</sup>

舍利は菩提の真実義にして大日如来そのものである。大師はいわば大日如来が垂迹せる尊い相である。その大師の舍利に対し、覺鑿は「南無高祖大師遍照金剛入定留身舍利」と唱えるように提案する。

道範の時代には、弘法大師の即身成仏について即ちこの身を捨てずに速やかに仏になることに関しての議論が起こされていた。

『金剛頂經開題勘註』には、仏位を証した後に父母から生じた業報である肉身が捨てられることはないであろうか、という質疑が

伝えられている。

⑩一。此の身を捨てずして頓に仏位を証する事

問う。父母所生業報血肉の身、之れを捨てざる歟

答う。禅林の云わく。二義有り。一に云わく。父母所生の身の捨不捨は行者の用心に随い不定なり。仍て八祖の中、多く此の身を捨てて舍利を遺す云云。父母生身中無漏五蘊本有常住なり。是れ則ち本有の十界なり。血肉の身を捨てると雖も無漏の蘊は不滅なり。此れに約して即身成仏を論ずる。神魂を以て常住五蘊と為すなり。云云一に云わく。父母肉身即ち常住無漏五蘊なり・父母肉身に六大を具足す。何ぞ簡別有らん哉。同じく六大法界の全体の故に。全く之れを捨てず。即ち頓に四曼の仏体なり。云云  
當山古来より後義に就いて談を為す。八祖の捨身は機の為に示現するなり。父母所生の身に速かに大覺の位を証す文

56

道範は禅林寺僧都即ち静遍の説による解決を諮っている。はじめに父母から生じた肉身の捨・不捨は修行者の用心によるものではないという。密教の祖師である八祖の多くは、この(肉)身を捨てて舍利(遺骨)を遺している。父母から生じた身中の無漏の五蘊は本有にして常住である。本有の十界ともいえよう。従って血肉の身を捨てさっても無漏の五蘊は不滅である。即身成仏はこれによって論じられる。靈妙なる神魂を常住の五蘊とすると、釈している。もう一つの説である。父母の肉身そのものが常住の無漏の五蘊であり、父母の肉身も六大を具足する。あらゆる存在は六大より生じたものにほかならない。このように二説がいわれる中で、高野山は古来より後者の立場を採用してきている。また此の身を捨てたと見られる八祖も修行者の機根に応じて示現するとも解き明かしている。

空海の即身成仏については、道範が『金剛頂経開題勘註』で検証するまでに、次のような議論が提出されていた。即身成仏とはこの肉身そのままに仏に成ることであり、密教の教えによって空海が体得するに至った境地とされる。その即身成仏を現した肉身は未来永劫に亘ってこの世に留まるのか否か、が問題とされたのである。道範の『菩提心論談義記』には

疑いて云わく。龍智と弘法とは生身にして今在す。即身と云うべし。自余の龍猛等何ぞ即身云う耶。答う。八祖は皆即身頓証の

人なり。而も其の肉身の捨不捨は機縁に随い只の果後の方便なり。<sup>57</sup>

とある。それは密教の祖師方の入寂をめぐる議論として提起されていた。質疑者は龍智菩薩と弘法大師は生身のままに今もその身を留めておられる。ところが龍猛菩薩などは『秘密曼荼羅教付法伝』に「蟬の如く蛻けて去んぬ」<sup>58</sup>と残されているように、蟬が殻から脱皮するかの様にこの世から去られている。このような龍猛菩薩等をどうして即身成仏の体現者ということができようか、というのである。

文面から判断されることは、弘法大師が龍智菩薩と同様にいま現在も肉身をもって生き続けておられること、また肉身を保持して仏の姿を今なお示現していることが即身成仏の要件とされていることである。つまりこの時期には、即身成仏⇨入定留身という構図が成立しつつあったと推測される。この難問に対して道範は、密教を継承した祖師はすべて即身頓証即ち即身成仏された方であり、円寂に際して肉身を留めるかどうかは、その時の機縁によるもので、(即身)成仏以後の方便の有り様の相違にはかならないと明言する。『金剛頂経開題勘註』の記述には『菩提心論談義記』を補完する措置がなされているように思われる。

## まとめ

- 1、『金剛頂経開題勘註』は建長三(一一五二)年以前に道範によって撰述されたと考えられる。
- 2、『辯頭密二教論』において空海は、『釈摩訶衍論』の不二摩訶衍法を自性法身とし、不二摩訶衍法を詳細に論じた經典として『金剛頂経』を示唆する。『金剛頂経開題』の撰述に際して空海は、『釈摩訶衍論』の教説による解明を積極的に行っている。その思想的意図を汲むように道範は『金剛頂経開題勘註』において『金剛頂経開題』を四家大乘や五重問答の教判による解釈をしている。ともあれ『金剛頂経』と『釈摩訶衍論』の緊密性を強調する見解になっている。併せて空海自身が『釈摩訶衍論』解釈で残した課題の解消を試みている。

3、また空海は『辯顕密二教論』において、『釈摩訶衍論』所説の如義言説を自性法身の言語にして真言であると解する。『釈摩訶衍論』では如義言説は真如門の言説とされる。空海の独自の視点による如義言説については、空海以降、様々な議論が生じる事になる。道範の頃には、当時興隆しつつあった禅宗の不立文字との同質性が取り沙汰されている。道範の師である静遍は『釈摩訶衍論』中の如義言説に真如如義と不二如義の存在を認め、この問題の解決を諮っている。道範もその流れを踏襲することになる。『金剛頂経開題勘註』では古来からの三説を紹介し、如義言説と同一視される不立文字との相異を明瞭ならしめる教説の構築を目指している。

4、教主論としての三転説の思想的典拠のひとつにされるのが『金剛頂経開題』であった。頼瑜によると、三転説は静遍が提唱した教主論とされる。道範はこの三転説をより鮮明にする作業を行っている。『貞應抄』では阿弥陀仏は驚覚仏とされる。『金剛頂経開題勘註』では、釈迦・無量寿仏・大毘盧舍那如来をそれぞれ生滅門・真如門・不二門の仏とし、『釈摩訶衍論』の教説との関わりを強調することになる。

5、空海の入定は一説には金剛定とされる。『金剛頂経開題』はその理論的根拠にされている。ところで『金剛頂経開題勘註』には、典拠となる一文によって教主論の三転説が論じられる。入定に関しては、即身成仏との教理的意味付けの問題が浮上していた。道範の頃に宝号「南無大師遍照金剛」が定着しつつあった事情も、このような問題が生じる背景にある。即身成仏した密教者は禪定に入って肉身を留めるといふ構図が形成されつつあった。道範は真言密教からの解明をはかると共に、留身についても機縁による見識を示し、この問題に一石を投じたことになる。

6、『金剛頂経開題勘註』の特徴として、静遍の教学的影響を指摘しておかなくてはならない。

註

- (1) 『金剛頂經開題勘註』△『統真言宗全書』七・一七b
- (2) 『金剛頂經開題』△『弘法大師全集』一・六九〇▽
- (3) 『金剛頂經開題勘註』△『統真言宗全書』七・七b▽
- (4) 『金剛頂經開題勘註』△『統真言宗全書』七・七b▽
- (5) 『成唯識論了義燈』△『大正藏』四三・六六〇a▽
- (6) 『金剛頂經開題鈔』△『日本大藏經』三三・一九七▽
- (7) 『金剛頂經開題勘註』△『統真言宗全書』七・七b▽
- (8) 『法華經開題』△『弘法大師全集』一・七六九▽
- (9) 『辯頭密二教論』△『十卷章』八一▽
- (10) 『辯頭密二教論』△『十卷章』九二〜九三▽
- (11) 『顯密二教論手鏡鈔』△『統真言宗全書』一八・二八八b〜二八九a▽
- (12) 『金剛頂經開題勘註』△『統真言宗全書』七・七b▽
- (13) 『釈摩訶衍論』△『大正藏』三三・六〇二ab▽
- (14) 『釈摩訶衍論』△『大正藏』三三・六〇二c〜六〇三c▽
- 論曰。二法二門各有十名。諸契經中別別說故而其法体無有差別。随彼功能立其名故。……三者名為出生龍王。此中有二。云何為二。一者出生光明龍王。二者出生風水龍王。第一龍王以淨光明而為依止。第二龍王以風水德而為依止。二種本法出龍王亦復如是。一本本法以純淨法而為其体。三自本法以染淨法而為其德故。……七者名為一法界。此中有二。云何為二。一者純白一法界。二者無尽一法界。第一法界如空劫時。第二法界如住劫時。……八者名為摩訶衍義如前說。
- (15) 『釈摩訶衍論』△『大正藏』三三・六〇二c〜六〇三c▽
- (16) 『華嚴一乘開心論』△『大正藏』七一・九a▽
- (17) 『釈摩訶衍論』△『大正藏』三三・六六八a▽『秘密漫荼羅十住心論』
- (18) 『釈論指事』△『弘法大師全集』一・六二▽
- (19) 『秘密漫荼羅十住心論』△『弘法大師全集』一・三九〇〜三九二▽
- (20) 『秘藏宝鑰』△『十卷章』一二七▽
- (21) 『金剛般若波羅蜜經開題』△『弘法大師全集』一・八三八▽
- (22) 『金剛頂經開題勘註』△『統真言宗全書』七・一四a▽
- (23) 拙論『声字実相義抄』(道範)に説かれる如義言説について―その二、禪宗(宋朝禪)と真言宗―の思想的交渉を中心として『仏教文化の諸相』所収
- (24) 『金剛頂經開題勘註』△『統真言宗全書』七・三b〜四b▽
- (25) 『辯頭密二教論』△『十卷章』九四▽
- (26) 『金剛頂經開題勘註』△『統真言宗全書』七・三b〜四b▽
- (27) 『釈摩訶衍論』△『大正藏』三三・六〇六a▽
- (28) 『大乘起信論』△『大正藏』三三・五七六ab▽
- (29) 『辯頭密二教論』△『十卷章』八七▽
- (30) 拙論『声字実相義抄』(道範)に説かれる如義言説について―その二、禪宗(宋朝禪)と真言宗―の思想的交渉を中心として『仏教文化の諸相』所収
- (31) 『辯頭密二教論手鏡鈔』△『統真言宗全書』一八・三〇〇ab▽
- (32) 『釈摩訶衍論論贊玄疏』△『大日本統藏經』一〜七二〜五〜四四七右
- 上▽
- (33) 『金剛頂經開題勘註』△『統真言宗全書』七・一〇b▽
- (34) 『瑜祇經拾古鈔』△『日本大藏經』三三・四三b〜四四a▽
- (35) 拙論『禪林寺静遍の提唱した教学について―特に教主論を中心として―』(高野山大学論叢「二六所収」)・『道範の浄土観』(高野山大学論

叢』二九所収)

- (36) 『秘宗文義要』△『真言宗全書』二二・七三a  
 (37) 『貞心抄』△『大正蔵』七七・六九七c  
 (38) 『貞心抄』△『大正蔵』七七・六九八a  
 (39) 『貞心抄』△『大正蔵』七七・六九八ab  
 (40) 『貞心抄』△『大正蔵』七七・六九九c  
 (41) 『金剛頂經開題勘註』△『統真言宗全書』七・四b  
 (42) 『弘法大師の入定観』五二〜五二二  
 (43) 『阿波国太龍寺縁起』△『弘法大師伝全集』一・三五b  
 (44) 『弘法大師講式』△『興教大師著作全集』下・三〜四  
 (45) 『高野山秘記』△『中世高野山縁起集』臨川書店・二六二a  
 (46) 『金剛頂瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』△『大正蔵』十八・三二八c  
 『弘法大師の入定観』で森田師は金剛定には顕密の二説があるといわれる。顕教という金剛定とは『俱舍論』第二四の「賢聖位」によると、小乗の阿羅漢向の聖者が入る禅定を金剛喻定をいい、欲界色界・無色界の三界における見惑・修惑の二惑を断じ尽くした第九無間道の禅定である。また『瑜伽論』第十二に説示される金剛喻三摩地をいう。等覚位の菩薩が仏位にいたる最後に住する三摩地とされ、一切の煩惱を摧破する定とされる。これらは顕教という金剛定である。
- (47) 『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇經』△『大正蔵』十八・二六〇a  
 (48) 『教王經開題』△『弘法大師全集』一・七二〇  
 (49) 『金剛頂經開題』△『弘法大師全集』一・六九八  
 (50) 『金剛頂經開題勘註』△『統真言宗全書』七・一〇b  
 (51) 『弘法大師の入定観』五〇七  
 (52) 『弘法大師御入定勘決記』△『弘法大師伝全集』一・二二〇b〜二二一a  
 (53) 『弘法大師御入定勘決記』△『弘法大師伝全集』一・二二〇b〜二二一a  
 (54) 『弘法大師御入定勘決記』△『弘法大師伝全集』一・二二〇b〜二二一a  
 (55) 『弘法大師講式』△『興教大師著作全集』下・三〜四  
 (56) 『金剛頂經開題勘註』△『統真言宗全書』七・八b  
 (57) 『菩提心論談義記』△『日本大蔵経』四七・三四六a  
 (58) 『秘密曼荼羅教付法伝』△『弘法大師全集』一・八
- △キーワード 五重問答、如義言説、三転説、入定、即身成仏